



沖

俳句雑誌[おき]

10月号

沖 発行所

孟

秋

能村 研三

伯母逝く

眼に力入れて見てゐる稲の花

穂 孕みの夕風通す祭 笛

文芸の徒過や瘦せずには終はる夏

眼目に始む笛の音夜の秋

私にとって親戚では最後の伯母が亡くなった。母の姉で九十七歳の大往生であった。母とは家が船橋であったこと、母と伯母の母、私にとっての祖母が私の家に同居していたことから、我が家とは頻繁に往来があった。父登四郎もこの伯母の夫が國學院で、林翔先生などと同級であったことから結婚したようだ。

母とは一つ違いであったが、二人は東京の下町で育ち、年も近いことから、二人の間にはライバル心があったようだ。縄跳びの回数も伯母に負けまいと頑張ったことや、伯母は私立に進んだが、母は府立の高女に進んだことなどを母から聞かされたことを覚えている。伯母は高校の教師であった伯父と共に、男三人、女二人の五人の子どもを育て、一時は生命保険会社の所長を務めるなどして家計を助け、肝っ玉玉さんのような人だった。私も子どもの頃は男の兄弟がいなかったの、従兄弟とよく遊んでもらった。

晩年は内房の老人施設で余生を送

一睡に屋根濡れてをり地藏盆

雁来月朱肉の蓋の唐模様

新涼の堂裏にある作務箒

蟬殻を舳先につけて舟花壇

萍の片寄りしげき微雨となり

孟秋や釘打ち初めのわが書屋

ったが、私が見舞に行けないうちに逝ってしまったことが悔やまれる。

私の母は脳腫瘍を患い、六十四歳で亡くなったが、母の度重なる大きな手術にも必ず立ち会ってもらい、最期に息を引き取るときも一緒にいてくれた。あんなにライバル心を燃やしていた母と伯母であったが、亡くなった月も七月と一緒に、生涯は三十数年の違いが出てしまったが、きつと黄泉の国で久しぶりの再会が出来たことだろう。

能村 研三



蒼茫集



白を全うす

北川英子

盆いつも母のむらさき水晶数珠
生者死者去り生身魂二人きり
濁流辺の芙蓉や白を全うす
流星が夢に飛び入る山泊り
夕蝸余命をなほも急かすかに
炎帝のジャブや余りに効き過ぎて

八月

溯上千津

腰椎の歪みを正し秋立てり
独り住み意中は秋の水のいろ
忌を集め八月灼くる天・地・人
間髪の間葉もう出ず露の草
流浪して新旧二度の盆供養
けふ我は何を為せしか蟬の殻

水中花

河口仁志

復興待つ仮設の家の水中花
すべり落つもののがきや蟻地獄
安達多良の夏野に妻と遊びけり
大胆に大河越えゆく黒揚羽
水着にて乗る江ノ電の一区間
鳴れば憂し鳴らねばさみし江戸風鈴

百物語

安居正浩

すててこや人はいつから尾を捨てし
故郷に床柱あり大昼寝
続編を匂はず映画夏終る
残る蚊のゐる病室の暗闇に
にこやかな顔風鈴に描かれをり
百物語百の一話で怖くなり

新世界 遠藤真砂明

明日へ張り出す海の日の高気圧
眠り子に一番花火開きけり
青々と大円空の炎ゆるかな
終戦日天地あつけらかんとあり
波音で知る新涼の新世界
ひそやかにつよし秋潮の引き力

夏帽 子 梅村すみを

丹念に身を舐めてをり梅雨の猫
大瑠璃の声こだませり山の湖
透くやうな肌の少女の夏帽子
逆立ちをして逆さまの雲の峰
せかせかと苦労性かも天道虫
睡蓮のいくつ咲いても淋しかり

をんをんと 辻 美奈子

新涼や柳行李に赤ん坊
をんをんと雲ひとつなき炎暑かな
夏蝶に天金のいろありにけり
広辞苑割りたる匂ひ夏休み
振花の螺旋右巻きひだり巻き
天辺にこ糸の抜けたる夏芝居

水の香り 田所節子

海月浮く地球ゆつたり回りぬて
玉の汗流す若さをまだ持てり
水飲んで身に秋風を通しけり
充電中てふ新涼の小さき灯
手花火に浮かぶ四つの膝小僧
さうめん洗ふ水の香りをもみこんで

月夜の貨車 千田百里

沙羅咲いて四囲のひんやりして来たる
訪ひて端居の端を借り申す
夏の夜やむかしテレビを一灯に
頬杖をつけと秋思の促せる
譜面繰る第二ビオロン爽やかに
月夜の貨車カウボーイなら飛び乗るぞ

たましひの鑄型 細川洋子

道問へば先づは日傘に入れ呉れし
空蟬といふたましひの鑄型かな
髪洗ふ天地引つ繰り返しつつ
遠雷や職の退き際ちらちらす
優曇華や葉裏を風雅一列ね
さつぱりと叱られてをる冷奴

老い遅々と 成宮紀代子

涼しさの法衣に朝の折目かな
夏帽に手庇を足し裏筑波
額咲いていつもひとりの鉄工所
帰省子に夜通し灯る隣家かな
美しきものには外すサングラス
溝萩や受け止めがたき老い遅々と

朝曇 大川ゆかり

ラヂオ体操一番乗りの捕虫網
天塩に仄かな苦み谷崎忌
コピー機の紙吐く音や朝曇
ソーダ水貝殻骨を陽に曝し
目の前に猫のかほ有る昼寢覚
月涼し菓子箱に猫眠りをり

進化 宮内とし子

純白となる水のあり滝の前
万緑の底ひに伊太利レストラン
極楽を存分に見せ古代蓮
二階まで朝顔咲かせ海人の家
豆飯の豆の片寄る懈怠かな
一粒の葡萄に進化及びけり

釘の熱さ 林昭太郎

井戸水に井戸の匂ひや半夏生
落ちながら霧となりゆく神の瀧
濤音の濤に遅るる夏の果
夏惜しむケルンに石を一つ足し
引き抜きし釘の熱さよ終戦日
風紋は風の履歴書鳥わたる

カラットの自由 甲州千草

盆来るとぽつり風呂敷たたみつつ
かき氷大気の不安ごと崩す
空返事らしき団扇のリズムなり
ケーキの燭揺らす羽無し扇風機
自転車の置きし小つむじ秋立てり
カラットの自由を遊ぶ芋の露

盆仕度 羽根嘉津

あかときの野のもの集め盆仕度
わだつみを呼ぶかになびく芋殻の火
走馬灯たぐる想ひの濃く淡く
父の日の戦没の碑に供華新た
青梅に塩馴染む夜のざんざ降り
舌切れし風鈴風の忘れもの

施餓鬼寺 森岡正作

番台に甚平が来てをさまれり
凌霄花女ばかりの家覆ふ
悪友のやけに老けたり泥鰌鍋
万物の音の轟く施餓鬼寺
爺爺と気安かりけり秋の蟬
斥候が来て中隊が来る稲雀

星 吉田政江

三十年西東京支部三十四年や根を張る多摩の夏の桑
早星創世記より争ふ地
銀河濃し賢治の空へ向く翼
スコップへ威嚇の尻尾銚虫
送り火の終りは風が攫ひけり
沼照牛久淵りや芋銭旧居の蟬しぐれ

未完のにほひ 久染康子

さみどりは未完のにほひ干瓢干す
夕焼に棚田一枚づつ応ふ
蟬脱皮すこし饅えたる匂ひせり
鶏頭花に血気盛んな鶏冠あり
涼み台病歴自慢始まりぬ
準決勝止まり夕焼けに噎びをり

爆心地 田辺博充

延々と鶏のがら煮て夏祭
滝へ寄るその滝の氣に肖るべく
烏瓜アバンギャルドの花咲けり
信号がさへづり秋の爆心地
台風一過空に箒目らしきもの
麴など買うて初秋の城下町

雲の峰 楠原幹子

根拠なき自信も力雲の峰
ハンカチに緊張の皺のこりけり
三伏の出刃包丁にうすき鏽
星の子のきらきら朝の箒草
青柿や次点といふはほろ苦き
プロパンガスに家繋がれて大西日

あめつちの芯 秋葉雅治

ふりしぼる生の音声じまう蟬しぐれ
生ぬるき水飲むばかり原爆忌
ねぶた絵の灯ともり跳人勢ひ立つ
あめつちの芯に竿燈揺らぎ立つ
秋立つと小病みのならひ八十路過ぎ
暮れてなほ路地に子の声地藏盆

潮鳴集

けんくわ結び

大沢美智子

祭帯けんくわ結びの跳ねたがる
勝鬨橋の綴ぢ目じぐざぐ日の盛
夕潮の刻々速し涼み舟
湧水の絹の手ざはり遠青嶺
露草や搾乳の音ほとぼしり

気 骨

岡澤 田 鶴

竹皮を脱ぐこれよりは気骨なり
堰奔る水をかすめて夏つばめ
夕顔や雨戸一枚開けてあり
でで虫や田畑重荷となりて候
夕顔の白拍子めく鄙灯り

ゼッケン

今 瀬 一 博

紫陽花を剪る額一つはづすと
右左違ふ顔して炎天下



読み止しは胸の上なり昼寝覚
糸抜いて返すゼッケン夏の風
お供への西瓜と決めぬ剪り残す

遠からず

栗原 公子

創世のごとき明るさ夕立あと
昼寝覚め冥界さして遠からず
涼しかり気負ひなければ気後れも
進むしかなき道ならむ大早
たぎる血のまだあり風の凌霄花

瞬の賑はひ

小 松 誠 一

目立てしたき鋸山の茂りかな
隠沼の瞬の賑はひ夕立来て
一球に集ふ衆目炎天下
目測のわづかに狂ふ炎天下
蓮華座におはす菩薩の涼しかり

沖作品



能村研三選

裏瀧や森の匂の水奔る

市川市

埴誠一郎

片陰に濃い茶瘦せる茶選びをり

青ぶだう旧約聖書のインディア紙

ひねもすの降りみ降らずみ吊忍

日盛のベンチに鎮座大やかん

揚花火忽と浮きたる煙火小屋

灯の入りて給仕せはしき納涼船

日照雨来る音のはじめの蓮かな

茅葺の厚き切り口苔の花

短夜の仮眠分け合ふ救急隊

夏雲よ人みな流浪の旅にあり

いち抜けてに抜け夕焼けの縄電車

鶏鳴のほどよく伸びる朝曇

オカリナは土民のつぶやき夏の川

夜釣船かすかにきしむ櫂の音

高久 正

アタリカ
イタゴラチ

鈴木 一広

でで虫もカフエの男も雨が好き

炎帝に押し戻さるる一步かな

経木よりはがす納豆朝ぐもり

茗荷の子分相應に暮らしをり

黙禱の朝を横切る黒揚羽

折紙の鶴に翼や星迎

夕焼や余生に欲しき返り点

サングラス躊躇の一步踏み出せり

思春期の座標の揺れて青山河

月見草砂丘の先に太平洋

虹たわわ海へ開ける峽の街

三伏や男の子掻き込む力めし

青春の蹉跌はあまた草いきれ

炎天の炙り出したるビルの影

漂泊のリズムしたたか海月かな

神奈川

神山 節子

千葉

小河原清江

千葉

神戸やすを

沖作品 15句選評

*
能村研三

青ぶだう旧約聖書のインディア紙 埴 誠一郎

この句、「青ぶだう」「旧約聖書」「インディア紙」という三つの素材を旨く響き合わせている。旧約聖書の「創世記」に記されている禁断の木の実は、神から食べることを禁じられた知恵の木の実のことで、西欧ではこの木の実は林檎であるとされるが、イチジクであるとする意見もある。東欧のスラブ圏では木の実は葡萄であるという説もある。聖書は最初羊皮紙を使用していたが、重く嵩ばることが問題で、これを解決するためにインドからロンドンへ送ったインディア紙が使われるようになった。別名バイブルペーパーとも呼ばれている。

短夜の仮眠分け合ふ救急隊 高久 正

消防署の救急隊員は、大変な仕事である。二十四時間体制で市民の安全と安心を助ける仕事で、交代制であっても日勤夜勤

を問わず、緊張の連続である。しかしこういう隊員たちのチームワークはすばらしく、いざという時に備えて、ちよつとの時間でも仮眠をし体力を養うようお互いの努力が続く。中七の「仮眠分け合ふ」に隊員同士の太い絆とやさしさが感じられる。

オカリナは土民のつぶやき夏の川 鈴木木 一広

オカリナの原型は一万二千年前に中央アメリカや中国にあつたとされる。現在のものはイタリアで改造されたものが使われているそうだが、素焼きの陶器で出来ているので、素朴な音色を奏でる。鈴木さんはアメリカ在住の方なので、この句もおそらくはアメリカのどこかを旅された時に作った句なのだろう。その音色からアメリカの土民のつぶやきに聞こえた。

でで虫もカフエの男も雨が好き 神山 節子

でで虫が雨が好きなのは当たり前かも知れないが、「カフエの男も雨が好き」というところでこの句が俄然面白くなった。蒸し蒸しじめじめして洗濯物が乾かない、靴が濡れる、傘が面倒、等々、雨にはたくさんのマイナス・イメージがある。梅雨時は、天気予報を見て憂鬱になる人も多いと思うが、雨が大好きという人も中にはいるようだ。カフエの男というのは、カフエで美味しいコーヒーを入れてくれるマスターを想像した。

(以下略)